

対人援助職の人との関わりにおける「判断の枠組み」の可視化

Visualizing “frame of reference” of Interpersonal Support Profession Relationship with People

久富 陽子¹, 阿部 和子², 前原 寛³, 山本 真知子⁴, 櫛木 彩⁵

Yoko Hisatomi¹, Kazuko Abe², Hiroshi Maehara³, Machiko Yamamoto⁴, and Aya Naraki⁵

¹大妻女子大学家政学部, ²大阪総合保育大学児童保育学部, ³至宝福祉会,

⁴大妻女子大学人間関係学部, ⁵大妻女子大学家政学部

キーワード：子ども理解, 保育記録, 判断の枠組み, 振り返り, OODAループ

Key words : Understanding Children, Childcare and Education records, Frame of Reference, Reflection, OODA Loop

1. 研究目的

本研究の目的は、保育現場における対人援助職である保育者の日々の保育の営み（援助や関わり等）について、意識的・無意識的に行っている対人援助における「判断の枠組み」を可視化（意識化）し、保育者としての重要な専門性の一側面である子ども理解、及び、保育実践を規定する園（保育現場）の文化的な側面について検討を行うことである。保育実践は目の前の子どもの姿を中心に展開するため、刻々と変化すると共に、同時多発的に様々なことが起きることが常である。保育者はその時の状況（子どもの姿、環境の状況等）を踏まえながら、最適と思われる援助を即座に判断したり、選択したりすることを余儀なくされている。そうした保育者の援助は、日常性が強いということから、保育者自身は特に意識化されにくいという特徴がある。そのため、保育の営み（援助や関わり）を生じさせている根拠（判断）を詳細に検討し、明示化することにより、保育者が自身の専門性の一側面を意識化することができ、そのことによって、保育の質の向上をはかることが期待できると考える。加えて、保育実践に影響を与えている文化的側面（時間、環境、行事、伝統等）が明示化され、それらを検討することができれば、さらに保育の質の向上が可能になるのではないだろうか。

2. 本研究の基底

本研究においては、保育実践における保育者の「判断の枠組み」を検討するために OODA ループ

の考え方を援用する。OODA ループとは、アメリカ空軍のジョン・ボイドが提唱した考え方で、戦闘の場にいる兵士たちが司令官の指示がなくとも状況を観察（Observe）し、状況判断・見通し（Orient）を行い、何をすべきかを決定（Decide）、自ら行動（Act）すること、また、その行動から次の対応を考えていくというものである（リチャーズ 2019）^{注1}。保育実践は、戦闘の場とは大きく異なるが、その時その場の状況を把握し、保育の方向付けとそれへの対応を即座に判断し、自らの保育行為を行なっているため、この OODA ループを援用し、保育実践を検討することは有用であろう。OODA ループは、既に多くのビジネスの場面、また、若干ではあるが就学以降の教育実践における研究においても援用されてきている^{注2}が、保育実践における援用は筆者らが知る限りまだ行われていない。

筆者らが、OODA ループの考え方を援用する理由は以下のとおりである。まず、保育の営みは PDCA サイクルとしてあらわされることが多い。P（計画）→D（実践）→C（評価）→A（改善）→P（計画）→D（実践）→・・・、というサイクルである。周知のとおり、C（評価）で、保育実践を振り返るということが行われ、そこで改善（A）されたことが次の保育計画（P）につながるということである。つまり、PDCA サイクルの場合、その最小単位が一日になっている。一方、実際に保育者は、保育実践の最中にもその時の子どもの姿や場の状況などを適時に読み取り、即時的な判断を行いながら、保育を行っている。そのため、OODA ルー

プの考え方を援用することにより、PDCA サイクルの D (実践) の部分をより近視眼的 (詳細) に捉え、保育実践の最中の保育者の判断や選択、決定等に注目することが可能になる。つまり、保育者の保育行為の源にある保育者の専門性をより詳細に検討することが可能になると考える。さらに言えば、PDCA サイクルは、まずは、P (計画)、つまり、保育における計画 (保育計画、指導計画等) が最初に位置付いている。そのことは、保育者が目の前の子どもの姿を捉えながらも、計画からの呪縛から自由になることが難しいという欠点があり、そのことに対する指摘もある^(注2)。もちろん、保育は行き当たりばったり行われるものではなく、大きくは「生涯にわたる人格形成の基礎を育む」^(注3)という大きな目的に向かって、計画的に行われることが求められている。しかし、特に具体的な活動内容などが記される短期の指導計画等 (日案、週案等) では、計画通りに保育が遂行できたか、計画通りに子どもが動けたかに重心がおかれがちになる危険性がある。そのため、子どもの主体性を大事にする保育においては、PDCA サイクルで行われている保育の営みを踏まえたとしても、実際に今、まさに目の前にいる子どもの姿はどのような状態なのか、何が起きているのかという観察 (O) から保育を構想し、実践しながらも何度も繰り返し検討することが重要となる。つまり、OODA ループを援用することは、より子ども理解に立脚した保育を行うことが可能になるため、保育の質の向上が期待できる。PDCA サイクルと OODA ループとの関係は、以下の図1のとおりである。

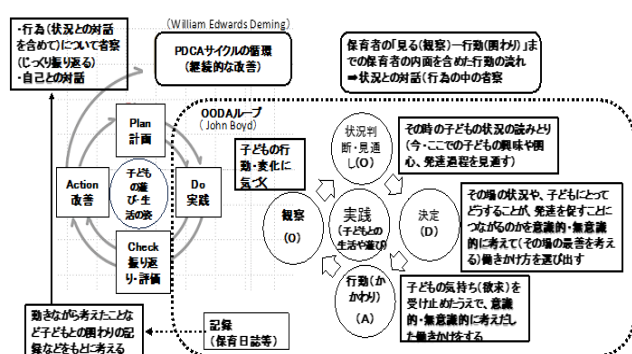


図1 PDCA サイクルと OODA ループの関係

ここでは図の表示の都合上、OODA ループもサイクルのような循環の形のように表されているが (図1参照)、実際には、ループ (loop) であるため、A (実践) → O (観察) → O (判断) → O (観察) → D (決定) → A (実践) → O (観察)・・・というように何度も必要な所に戻ってくる (ループする) ことが可能であり、そのことによって、より最適な援助が可能となる。

こうした考えを研究の基底に据え、今年度は次のような内容で研究を遂行してきた。

3. 研究実施内容

研究方法は、令和5年度より実施している方法と基本的に同じ手順で行っている。令和6年度は共同研究プロジェクトの助成を得たことで、対象となるクラスを増やした。P県にあるA認定こども園においては、幼児1クラス、乳児1クラスの合計2クラスにし、保育者も幼児クラス2名、乳児クラス2名の合計4名とした。また、園の文化的要素による違いを見るためにQ県にあるB認可保育所の幼児クラス1クラス、対象となる保育者1名も加えた。結果的に、2つの園、合計3クラス、保育者5名に研究の協力を得た。なお、この研究は、大阪総合保育大学研究倫理委員会にて承認されている。(承認番号児保研-092) 以下、具体的な研究の対象と方法である。

1) 対象

A認定こども園5歳児クラスX組を担当している2名の保育者及び1歳児クラスY組を担当している2名の保育者、及び、B認可保育所3歳児クラスZ組を担当している保育者1名、計5名の保育者。

2) 方法

①それぞれ、任意の期間 (月曜日から金曜日までの5日間を各クラス2回実施) について、日々の保育記録を作成してもらう。この保育記録の記入用紙はOODAループを意識して筆者らが作成したものである。(図2参照) 各日、保育者が最も印象に残っているエピソードを中心としながら、どのようなことが起きたのか (観察)、そのことをどう考えたのか (判断)、どのような決定をし (決定) どうかかわったのか (具体的な援助、行動) を意識して記載できるような形式になっている。

②後日、それらをもとにした筆者らを交えての話し合い (振り返り) を行う。話し合いには、園長や主

任等も同席しているが、基本的に保育者と筆者らが中心となっていく。

③この話し合い（振り返り）をレコーダーに記録し、逐語録を作成する。さらに、保育者の語り及び筆者らの質問や語りをまとまりに区切り、そのまとまりを代表する語りをセンテンスとし、分析の資料とする。

保育記録の期間、話し合いの日時は表1、表2のとおりである。

記入用紙(/ ~ /) 保育記録と振り返り・省察用紙

ねらい	○
提案する活動	○

保育の記録 月 日(曜日) 欠席者

記録者	保育の記録	どのような場面の記録か

保育記録から1つのエピソードを抜き出して「観察(見たことの記録)」に書き入れる。

保育しながら気づいたこと・考えたこと(保育中)	
①観察(見たこと(事実)の記録) (保育記録から抜き出した記録)	②状況把握・見通し (その場をどのように理解したか)
③決定 (どのように関わろうとしたのか)	④関わり(かかわりの事実) (保育記録から抜き出した記録)
保育が終わって、記録を通して気づいたこと・考えたこと	

ここは6人で討論した後に書き込む

討論を通して気づいたこと・考えたこと

図2 保育記録用紙

表1 A 認定こども園 記録・話し合いの日程

対象クラス・回	保育記録の期間	話し合い(振り返り)の日時	参加者
1歳児クラス・1回目	2024年7/22~7/26	2024年8/22	保育者1名(1名病欠) 久富 阿部 山本 檜木
1歳児クラス・2回目	2024年10/21~10/25	2024年11/6	保育者2名 久富 阿部 檜木
5歳児クラス・1回目	2024年9/9~9/13	2024年10/3	保育者2名 久富 阿部 前原 山本 檜木
5歳児クラス・2回目	2024年11/25~11/29	2024年12/23	保育者2名 久富 檜木

表2 B 認可保育所 記録・話し合いの日程

対象クラス・回	保育記録の期間	話し合い(振り返り)の日時	参加者
3歳児クラス・1回目	2024年9/9~9/13	2024年10/19	保育者1名 久富 阿部 前原

4. 分析の方法

既に令和5年度に5歳児クラス(保育者2名)を対象にした研究の成果として、仮の保育者の判断の枠組みを図式化した(図3参照)。具体的には、2023年9月25日~29日の5日分の保育記録に基づく話し合い(振り返り)の逐語録から、保育者2名の語り、151のセンテンスを分析の対象とし、筆者らでセンテンスの背後の読みとりを行い、最終的なセンテンスの読みとり表を作成した。さらに、再度、筆者らで検討を重ね、センテンスの「まとまり」を作成した。この「まとまり」は保育者の保育行為の「判断の枠組み」の下位の概念と位置づけ、仮に「枠」と名付けた。「枠」は以下の9つ作成された。

「1. 子ども一人一人の興味」「2. 子どもの特性」「3. 子どもの姿からの育ち」「4. ねらい・投げかけ」「5. ねらいや方法の修正」「6. 子どもから保育を発展」「7. 連携」「8. 園生活の基底としての日課、行事等」「9. 振り返る」である。この9つの「枠」をさらに検討すると、大きく分けて、具体的な「子ども理解」に関わるものと「保育実践」に関わるものがあることがわかった。そのため、仮の上位概念としてこの2つを「大枠」「Ⅰ子ども理解」「Ⅱ保育実践」とした。「Ⅰ子ども理解」の「大枠」には「枠」の1~3、「Ⅱ保育実践」の「大枠」には「枠」の4~9が該当した。

加えて、9つの「枠」に含まれているセンテンスを詳細に検討すると、「枠」の下位概念となる「小枠」に分類して整理できることがわかった。結果、「1. 一人一人の興味」は4つ、「2. 子どもの特性」は2つ、「3. 子どもの育ちからの育ち」は2つ、「4. ねらい・投げかけ」は4つ、「5. ねらいや方法の修正」は3つ、「6. 子どもから保育を発展」は4つ、「7. 連携」は2つ、「8. 園生活の基底としての日課、行事等」は2つ、「9. 振り返る」は3つの「小枠」が生成された(小枠の合計27)。「枠」ごとに「小枠」を入れてセンテンスを分類した図を作成した(図3参照)。詳細については、久富・檜木・阿部(2024)参照のこと^{注4)}。

